

## 大学生における性役割意識と身体満足度, 及びそれらの関連性についての検討 性差及びスポーツ経験の差に着目して

萱村 俊哉, 駒井 説夫\*, 黛 誠\*\*

(武庫川女子大学文学部人間科学科)

(\* 高知大学教育学部保健体育科)

(\*\* 武庫川女子大学文学部健康・スポーツ科学科)

## The Relationship between Sex Role Awareness and Body Cathexis in University Students: Focusing on Sex Differences and the Differences of the Experience of Sports Activities

Toshiya Kayamura, Setsuo Komai\*, and Makoto Mayuzumi\*\*

*Department of Human Sciences, School of Letters,*

*Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

*\*Department of Health and Physical Education, Faculty of Education,*

*Kochi University, Kochi 780-8520, Japan*

*\*\*Department of Health and Sports, School of Letters,*

*Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

### Abstract

The present study examined the relationship between sex role awareness and body cathexis (a degree of the satisfaction with the shape or functions of one's own body) which was assessed by SRBI (self-rating body images questionnaire) in 453 university students consisted of both athletes students (sports group) and general non-athletes students (general group). Factor analysis of the sex role awareness questionnaire revealed two factors which were interpreted as 'male-specific scales' and 'female-specific scales'. Based on these two factors, four variables (male-M, male-F, female-M, and female-F) concerned with the sex role were calculated. Furthermore, factor analysis of the SRBI revealed that there were four factors (variables) interpreted as 'body shape image', 'visceral organs' function image, 'face image' and 'digestion image' respectively. Independent ANOVAs demonstrated that there were significant main effects of the sex on Male-F, Female-M, 'body shape image', 'face image' and the total score of SRBI, but were not any significant main effects of the group on all variables besides 'digestion image'. The number of the variables of the sex role which showed the significant correlation coefficients with the total score of SRBI was less in the sports group than in the general group. In addition, multiple regression analysis also revealed that the total score of SRBI effected on many variables of the sex role in the general group but did not in the sports group.

### I. 緒 論

性役割意識とは、態度、行動、あるいは性格面において男性あるいは女性の特徴として望ましいと考える心理特性のことであり、その中には男性にとって望ましいと考える男性役割期待と、女性にとって望ま

しいと考える女性役割期待が含まれる。また、性役割意識には、文化の中に一般的に広がっている社会的なものと、個人が独自に持っているものがあるが、その中で個人的な性役割意識は学習によって形成される。柏木(1967)<sup>1)</sup>によると、性役割の学習はまず幼児期の親との同一視から始まり、次に親以外の同性をモデルとした模倣学習、さらに具体的な人物ではなく、抽象的なイメージをモデルとした学習によって青年期までに形成されていくと考えられている。

斉藤(1985)<sup>2)</sup>は、このような性役割の学習に影響を及ぼす要因として、第二性徴や体型(身長や体重)などの身体的要因と、自己の身体の形態や機能について満足している程度(身体満足度)の認知的要因に着目し、これらの要因が性役割学習に及ぼす影響について、小学校6年生と中学2年生の青年前期(思春期)の学童を対象に検討している。その結果、彼は、身体的要因や認知的要因(身体満足度)は、性役割実現度(自分が実際に男性あるいは女性役割をどの程度実現しているかについての自己認知)に対しては影響を与えているが、男性役割期待や女性役割期待自体に対してはあまり影響を与えていないと報告している。その理由として彼は、性役割期待は個人独自のものとしてよりも、社会的なステレオタイプとして存在しているため、身体的要因や身体満足度などの個人的要因はそれらに対して影響しなかったと考察している。

それでは、青年後期の大学生においてもこのような結果がそのまま当てはまるのであろうか。周知のように、青年期は自我意識の覚醒の時期であり、性役割の学習過程においても独特の意味を持っている(柏木, 1967)<sup>1)</sup>。すなわち、青年期は、それ以前の、社会的ステレオタイプとしての性役割を無批判に受け入れていた児童期までとは異なり、それを批判的に吟味し、修正を加えながら独自の性役割意識を形成する時期である。したがって、このような青年期特有の発達過程の開始期に該当する青年前期と、それが終了に近づく後期とでは、個人の性役割意識の内容が異なってくることが予測される。そしてこの性役割期待が修正される過程において、身体満足度などの個人変数が何らかの影響を及ぼす可能性が考えられるのである。

以上の理由により、本研究では、青年前期において見いだされた斉藤による上記の所見、ことに性役割期待と身体満足度との関連性の希薄さが、青年後期の大学生でも認められるか否かについて検討することを目的の一つとした。また、斉藤の研究<sup>2)</sup>では取り上げられなかったが、性役割の学習に影響を及ぼす要因の候補として、身体的要因、認知的要因のほかに行動的要因も忘れてはならないと思われる。そこで本研究では、行動的要因としてスポーツ経験に着目し、それが性役割期待と身体満足度、あるいは両者の関連性に及ぼす影響について検討することにした。

## Ⅱ. 対象と方法

### 1. 対象

国立と私立大学各1校の学生(運動部員を含む)計503名を対象とした。

### 2. 方法

質問紙法を用いた。質問紙は、性役割意識と身体満足度に関する質問項目の他に、身長、体重、理想身長(なりたいたいと思う身長)、理想体重(なりたいたいと思う体重)、大学で運動部に所属しているか否か、所属する運動部の名称、大学に入学するまでの運動歴を尋ねる質問項目から構成された。大学の授業時間等を利用して配布し、その場で回収した。運動部に関しては特定の種目に偏らないように、なるべく幅広い種目の部員に回答を求めた。

#### (1) 性役割意識に関する項目

石田(1988)の研究<sup>3)</sup>から、男性性項目、女性性項目、人間性項目のそれぞれ12項目ずつの計36項目の質問項目を用いた(表1参照)。36項目について、男性(あるいは女性)に対する社会通念としてどの程度一般的だと思うかを、1-非常によく当てはまる、から、6-全く当てはまらない、までの6件法で回答させた。

#### (2) 身体満足度に関する項目

忠井ら(1993)<sup>4)</sup>の自己身体イメージテスト(Self Rating Body Image Test, 以下, SRBI)の高校生版を用いた。これは、身体に関する全38項目の部位の形や働きの好感度について、1-とてもいやな感じがする(きらいである)、から、5-とてもよい感じがする(すきである)までの5件法で回答させるものである(表

2 参照)。

### (3) 分析の手順

まず性役割意識と身体満足度に関する項目について因子分析を行う。次に、体型、性役割意識、身体満足度に関する各変数をそれぞれ従属変数とし、性と群別(スポーツ経験の差;後述)を独立変数とした分散分析を行う。さらに、各性別、群別に各変数間での相関係数を算出する。最後に性役割意識に関する変数を目的変数とし、体型と身体満足度に関する変数を説明変数として重回帰分析を行う。

## Ⅲ. 結 果

### 1. 対象者の選定と人数の内訳

質問紙中の所属する運動部の名称と運動歴について回答させる項目への回答結果により、被験者を「スポーツ群」と「一般群」の2群に分類した。スポーツ群は現在何らかの運動部に所属しており、調査時点から遡って過去5年以上、恒常的にスポーツ活動に参加していた者であり、一般群はそれらの経験を持たない者であった。

質問紙の回答に不備の見られた者、スポーツ群、一般群に何れのカテゴリー基準にも合致しなかった者が計50名みられた。これらの者を除いたため、最終的に453名(平均年齢20.4歳)が分析対象となった。

スポーツ群の中の所属運動部の種類とその人数内訳は、スポーツ群男子69名、同女子106名、一般群男子121名、同女子157名となった。スポーツ群の所属運動部の種類とその人数内訳は、男子の場合、野球21名、陸上競技15名、ラグビー11名、バスケットボール9名、バドミントン6名、サッカー4名、水泳1名、剣道1名、柔道1名であった。一方、女子では、バスケットボール20名、陸上競技17名、ソフトボール10名、水泳8名、テニス7名、サッカー6名、バレーボール6名、ハンドボール6名、バドミントン5名、体操5名、ダンス5名、卓球2名、剣道2名、少林寺拳法2名、バレエ2名、スケート1名、エアロビクス1名、柔道1名であった。

### 2. 性役割意識項目の因子分析

各被験者に対して36項目の特性について、男性(あるいは女性)に対する社会通念としてどの程度一般的だと思うかに関して回答させたので、項目ごとに男性に対するものと女性に対するものの2種類の評定値が得られた。

男女の性役割意識の様相について検討する目的で、柏木(1972)<sup>5)</sup>、斉藤(1985)<sup>2)</sup>の方法に倣って、36の各項目ごとに、同一被験者の男性評定値から女性評定値を減じ、それを差異得点とした。この差異得点は、その絶対値が大きいほど、その項目が男性性あるいは女性性を強く示す特性であることを示している。各項目ごとに男性役割得点と女性役割得点の間の差の検定(t検定)を実施した結果、36項目の中で有意差( $p < .05$ )のみられたのは32項目であった。すなわち、これら32項目は男性性あるいは女性性の何れか一方の特性を示す項目と考えられる。有意差の見られなかったのは、「友達が何か問題を抱えているときにそれを助ける」「社交性に富んでいる」「自分のことを自慢する」「自由を重視する」の4項目であり、石田の研究(1988)<sup>3)</sup>ではこれらの項目は何れも12個の人間性項目の中に分類されていたものであった。

次に、これら32項目の差異得点について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。その結果、7因子が固有値1以上を示した。しかし、第4因子以下の固有値は比較的小さい数値であったので、上位3因子を抽出することにした。さらに、これら3因子の間で複数の因子にわたり因子負荷量が.35以上ある項目を除いた後、再度、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。その結果、2因子が固有値1以上を示した。回転前における第1因子、第2因子の固有値はそれぞれ、5.23、1.52であり、累積寄与率は48.2%であった。因子負荷量.35以上の項目を抽出した結果、第1因子は「社会的に活躍する」、「政治国際問題に関心がある」などの9項目で、差異得点がプラスの項目から構成されていたので「男性特性尺度」とした。一方、第2因子は「そうじや洗濯が向いている」、「料理をするのが向いている」などの5項目から成り、差異得点がマイナスの項目であるので「女性特性尺度」とした(表1)。各尺度についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出した結果、それぞれ、.830、.782となり、信頼性は確保されていた。以下、男性特性尺度に含まれる9項目の評定値の合計得点をM得点、女性特性尺度に含まれる5項目の評定値の合計

得点を F 得点と名付けることにした。したがって、各被験者ごとに男性役割における M, F 得点, 女性役割における M, F 得点という 4 種類の得点(以下, 男性 M, 男性 F, 女性 M, 女性 F と略す)が得られたことになる。

表 1. 性役割意識の項目の因子分析結果(N=453)

項 目	因子負荷量
第 1 因子 男性特性尺度	( $\alpha = .830$ )
社会で重要な人物になりやすい	.604
ひとりで独立して生きて行ける	.504
政治国際問題に関心がある	.695
指導力がある	.618
視野が広い	.480
野心家である	.589
社会的に活躍する	.769
たくましいものである	.361
学歴がある方がよい	.363
第 2 因子 女性特性尺度	( $\alpha = .782$ )
育児に向いている	.614
料理をするのが向いている	.627
そうじや洗濯に向いている	.812
冒険的物語よりも感傷的な物語の方を好む	.497
可愛らしさを持っている方がよい	.506

注) 負荷量 .35 以上のものを示した。

$\alpha$  は  $\alpha$  係数を示す。

### 3. 身体満足度項目(SRBI)の因子分析

SRBI の 38 項目の結果について因子分析(主因子法, バリマックス回転)を実施した結果, 10 因子が固有値 1 以上を示した。その後, 2 つ以上の因子にわたって因子負荷量 .35 以上を示す項目を除外しながら, 因子数を減少させ, その度に因子分析(主因子法, バリマックス回転)を繰り返し, その結果, 4 因子を抽出した。回転前の第 4 因子までの固有値はそれぞれ, 5.76, 2.23, 1.33, 1.22 となり, それらの累積寄与率は 52.7%であった。因子負荷量 .35 以上の項目を選択した結果(表 2), 第 1 因子は「からだのつくり(プロポーション)」, 「脚(あし)のかたち」など, 主として身体のかたちに関する 7 項目から構成されていたため, 「体型イメージ」と命名した。第 2 因子は「肺のはたらき」, 「神経のはたらき」など臓器の機能面に関する 5 項目から構成されていたので, 「内臓機能イメージ」と命名した。第 3 因子は「横顔」, 「鼻のかたち」など顔面に関する 5 項目から構成されていたので, これを「顔面イメージ」と命名した。さらに第 4 因子は, 「食べ物の消化」, 「排泄(尿, 大便)のはたらき」などの 3 項目から構成されていたため, これを「消化イメージ」と命名した。各因子の項目間の内的一貫性を調べるために, Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した結果, それぞれ .857, .713, .668, .688 となり, 何れの因子も妥当な信頼性を示した。

表 2. SRBI の因子分析結果(N=453)

項 目	因子負荷量
第 1 因子 体型イメージ	( $\alpha = .857$ )
おしり・ヒップのかたち	.692
腕	.630
膝	.513
脚(あし)のかたち	.741
からだのつくり(プロポーション)	.772
胸(バスト, 乳房)のかたち	.521
今の体重	.648
第 2 因子 内臓機能イメージ	( $\alpha = .713$ )
肝臓のはたらき	.500
肺のはたらき	.647
脳のはたらき	.477
神経のはたらき	.503
心臓のはたらき	.496
第 3 因子 顔面イメージ	( $\alpha = .668$ )
眼のかたち	.463
あごのかたち	.519
鼻のかたち	.523
耳のかたち	.361
横顔	.552
第 4 因子 消化イメージ	( $\alpha = .688$ )
食べ物の消化	.723
排泄(尿, 大便)のはたらき	.606
食欲	.524

注) 負荷量 .35 以上のものを示した。

$\alpha$  は  $\alpha$  係数を示す。

#### 4. 体型、性役割意識、及び身体満足度の性別と群による比較

身長と体重の所見に基づいて BMI(kg/m<sup>2</sup>)を算出した。また理想身長と理想体重に基づき理想 BMI(kg/m<sup>2</sup>)を算出した。これらの結果を含め、表 3 に性別、群別にみた各変数の平均値と標準偏差を示した。体型に関する 6 変数の各々を従属変数にして、性(2)×群(2)の分散分析を行った結果、すべての変数において性及び群の主効果が有意となり、交互効果は有意にはならなかった。これらの分散分析から、体型に関しては、女子よりも男子の方が、また一般群よりもスポーツ群の方が有意に大きい(重たい)こと(あるいは望んでいること)が明らかになった。

表 4 に性別、群別にみた性役割意識と身体満足度に関する各変数の平均値と標準偏差を示した。まず、これらをそれぞれ従属変数として、性別間、群間での体格の違いの影響を調整する目的で、実際の身長と BMI を共変量として用いて、性(2)×群(2)の共分散分析を試行した。しかしその分析結果をみると、共変量として用いた実際の身長は、何れの分析においても被験者間効果の検定において非有意となり、また BMI も体型イメージを従属変数とした分析においてのみ被験者間効果が有意( $p < .001$ )となったに過ぎなかった。そこで再度、体型イメージを従属変数とした場合に限り BMI を共変量とした共分散分析を実施

し、それ以外の8変数を従属変数とした分析では、性(2)×群(2)の分散分析を行うことにした。その結果(表4)、性の主効果については、男性F(男子よりも女子の方が高得点)、女性M(男子よりも女子の方が高得点)、体型イメージ(女子よりも男子の方が高得点)、及び顔面イメージ(女子よりも男子の方が高得点)を従属変数とした分散分析においてそれぞれ有意となった。群の主効果については、性役割意識の4変数には有意なものはみられず、身体満足度に関する変数の中の消化イメージにおいてのみ有意となり、消化イメージは一般群よりもスポーツ群の方が高得点であることが明らかになった。ただ、身体満足度の各変数の平均値は、全体的に見て、一般群よりもスポーツ群の方が得点が高い傾向が見受けられた。また、何れの分析においても交互効果は有意にはならなかった。

表3. 性別、群別にみた体型に関する6変数の平均値(SD)と分散分析の結果

	男 子		女 子		分散分析(F 値)		
	スポーツ群	一般群	スポーツ群	一般群	性	群	交互効果
	N=69	N=121	N=106	N=157			
身長(cm)	173.0(6.2)	171.0(5.3)	160.5(6.2)	158.6(4.7)	536.6***	13.5***	0.0
体重(kg)	67.2(7.0)	64.1(8.5)	55.0(9.2)	50.3(5.5)	385.4***	34.3***	1.4
BMI(kg/m <sup>2</sup> )	22.5(2.1)	21.9(2.7)	21.3(1.6)	20.0(1.9)	54.4***	19.6***	3.3
理想身長(cm)	179.2(4.8)	176.9(4.9)	163.0(3.9)	161.5(3.6)	1437.5***	20.6***	1.2
理想体重(kg)	71.2(7.5)	66.4(5.9)	50.7(4.5)	47.1(3.0)	1602.6***	72.0***	1.4
理想 BMI(kg/m <sup>2</sup> )	22.2(1.9)	21.1(1.7)	19.1(1.4)	18.0(1.0)	486.0***	47.4***	0.2

\*\*\* $p < .001$

表4. 性別、群別にみた性役割意識と身体満足度の各変数の平均値(SD)と分散分析の結果

	男 子		女 子		分散分析(F 値) <sup>a</sup>		
	スポーツ群	一般群	スポーツ群	一般群	性	群	交互効果
	N=69	N=121	N=106	N=157			
性役割意識							
男性役割 M 得点	37.8(6.4)	37.5(7.2)	38.3(5.0)	39.2(5.7)	3.4	0.2	1.1
男性役割 F 得点	16.4(3.4)	16.6(4.4)	17.9(3.7)	17.8(3.8)	12.6***	0.0	0.1
女性役割 M 得点	30.4(5.8)	30.8(6.8)	32.8(5.0)	32.1(6.6)	9.1**	0.0	0.8
女性役割 F 得点	24.7(3.2)	24.1(4.0)	24.4(3.7)	24.5(3.7)	0.0	0.5	0.6
身体満足度							
体型イメージ	29.0(5.0)	28.6(6.0)	22.7(6.5)	22.1(6.4)	142.4***	3.3	0.4
内臓機能イメージ	21.9(4.4)	21.5(4.8)	21.5(4.5)	21.2(4.4)	0.7	0.6	0.0
顔面イメージ	21.1(4.3)	20.8(4.7)	19.1(4.3)	19.6(4.6)	13.0***	0.1	0.8
消化イメージ	10.7(2.5)	9.8(2.7)	9.9(2.5)	9.7(2.5)	3.4	4.9*	1.4
合計得点	115.8(15.9)	113.0(19.1)	104.5(18.2)	103.6(18.2)	33.9***	1.1	0.3

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

a: 体型イメージでは BMI を共変量とした共分散分析を実施した。

##### 5. 性役割意識と身体満足度との間の相関と重回帰分析による検討

性別、群別に、身長と体重、BMI、理想の身長と体重、理想 BMI、男性 M、男性 F、女性 M、女性 F、及び身体満足度の合計得点の各変数間での相関係数(Pearson の積率相関)を算出した。その結果を表5(男子)、表6(女子)に示している。男女、両群ともに、体型に関する各変数間では相互に有意な相関が多く見られた。ところが、身体満足度の合計得点と他の変数との相関に注目すると、一般群では、男子は身体満足度の合計得点は男性 M、女性 F、及び理想 BMI との間に有意な相関がみられ、女子でも男性 M、男性

F, 女性 M, 体重, 及び BMI の 5 変数との間に有意な相関がみられたのに対し, スポーツ群では, 男子の場合, 身体満足度は何れの変数とも有意な相関は得られず, 女子においても身体満足度と有意な相関が見られたのは唯一, 男性 F のみであった。

次に, 男性 M, F 及び女性 M, F のそれぞれを目的変数とし, 身体満足度の合計得点, 身長, BMI, 理想の身長, 及び理想 BMI の 5 変数を説明変数として重回帰分析(ステップワイズ法)を施した。体重と理想の体重は, それぞれ BMI 及び理想 BMI と高い相関を示したため説明変数から除いた。

重回帰分析の結果(表 7), 一般群の女子では, 4 つの中 3 つ(男性 M, 男性 F, 女性 M)の性役割得点に対して身体満足度が有意に寄与しており, 身体満足度の高い女子ほど, 男性に対して両性の特性を期待し, 女性に対し異性(男性)の特性を期待する程度が上昇することが判明した。また一般群の男子でも, 男性 M, 女性 F に対して身体満足度が有意に寄与しており, 身体満足度の高い男子ほど, それぞれの性別に合致した性特性を期待する傾向が高まることが明らかになった。これらに加え, 女子では, 女性 F に対して理想 BMI が寄与しており, 男子では男性 M と女性 F に対して理想 BMI が寄与していた。これらの標準偏回帰係数( $\beta$ )がすべて負であったことから, よりスリムな体型を求める者は, 女子では女性役割として女性特性を期待し, 男子では男性役割として男性特性を, 女性役割として女性特性を期待する傾向が高まることが明らかになった。

一方, スポーツ群では, 女子の場合, 身体満足度は男性 F 得点に対して有意に寄与していたが, それ以外は有意な説明力を持つ変数はみられなかった。男子でも身体満足度は 4 つの性役割得点のすべてに対して有意な説明力を持たなかった。男子では, 男性 F 得点と女性 M 得点に対して, それぞれ身長と理想 BMI だけが有意に寄与していた。つまり身長の高い男子ほど, 男性役割に女性特性を期待する傾向にあり, よりスリムな体型を希求する男子は, 女性役割に男性特性を期待する傾向が強くなることが明らかになった。

以上のように, 男女ともに, 一般群に比べてスポーツ群における性役割意識と身体満足度との結びつきは弱いものであった。

表 5. 各変数間における相関係数(Pearson  $r$ )—男子—

身長	体重	BMI	理想身長	理想体重	理想 BMI	男性 M	男性 F	女性 M	女性 F	身体満足度合計
一般群										
身長	.37**	-.12	.56**	.37**	.02	-.01	-1.5	.02	-.02	.08
体重	.50**	.87**	.19*	.38**	.29**	.03	-.05	.08	-.06	.13
BMI	-.21	.74**	-.07	.21*	.28**	.05	.03	.08	-.05	.09
理想身長	.71**	.49**	-.01	.43**	-.21*	.06	-.02	.00	.05	-.12
理想体重	.45**	.72**	.47**	.58**	.79**	-.10	-.03	.01	-.12	.13
理想 BMI	.10	.58**	.58**	.08	.86**	-.14	-.02	.01	-.17	.22**
男性 M	.09	.04	-.02	.13	.04	-.03	-.05	-.08	.56**	.27**
男性 F	.24*	.23	.07	.20	.10	.00	-.01	.47**	.01	.06
女性 M	.15	-.02	-.14	.06	-.18	-.26*	.18	.55**	-.04	.07
女性 F	-.02	.08	.11	.03	.14	.16	.22	-.16	-.20	-.27**
身体満足度合計	-.05	.01	.04	-.05	-.02	.01	.13	.19	.00	-.00
スポーツ群										

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

右上は一般群, 左下はスポーツ群の相関係数を示している。男性 M: 男性役割 M 得点, 男性 F: 男性役割 F 得点, 女性 M: 女性役割 M 得点, 女性 F: 女性役割 F 得点, 身体満足度合計: 身体満足度合計得点。

表 6. 各変数間における相関係数(Pearson r)－女子－

	身長	体重	BMI	理想身長	理想体重	理想BMI	男性 M	男性 F	女性 M	女性 F	身体満足度合計
一般群											
身長		.54**	.00	.55**	.31**	-.09	.00	.00	.05	-.12	.01
体重	.73**		.84**	.32**	.43**	.26**	-.12	.05	-.08	-.11	-.17*
BMI	.02	.70**		.03	.32**	.36	-.03	.06	-.13	-.06	-.21**
理想身長	.67**	.53**	.08		.59**	-.13	.06	.10	.05	-.04	-.03
理想体重	.48**	.66**	.46**	.60**		.73**	-.05	.10	-.04	-.21**	.00
理想 BMI	.16	.48**	.52**	.10	.85**		-.11	.03	-.10	-.22**	.03
男性 M	-.07	-.02	.04	-.14	-.09	-.03		.04	.17*	.46**	.16*
男性 F	.07	.04	-.02	-.01	-.02	-.02	.03		.57**	.02	.20*
女性 M	.08	.04	-.02	-.04	-.02	.00	.20*	.48**		-.07	.40**
女性 F	.06	.01	-.05	-.03	-.03	-.02	.48**	.19	-.02		.10
身体満足度合計	-.04	-.16	-.19	-.10	.02	.08	.07	.26**	.07	.05	
スポーツ群											

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ 

右上は一般群, 左下はスポーツ群の相関係数を示している. 男性 M: 男性役割 M 得点, 男性 F: 男性役割 F 得点, 女性 M: 女性役割 M 得点, 女性 F: 女性役割 F 得点, 身体満足度合計: 身体満足度合計得点.

表 7. 重回帰分析(ステップワイズ法)により選択された説明変数と標準偏回帰係数( $\beta$ )

目的変数	男子		女子	
	スポーツ群	一般群	スポーツ群	一般群
男性役割 M 得点		身体満足度 ( $\beta = .32***$ ) 理想 BMI ( $\beta = -.21*$ )		身体満足度 ( $\beta = .16*$ )
男性役割 F 得点	身長 ( $\beta = .24*$ )		身体満足度 ( $\beta = .26**$ )	身体満足度 ( $\beta = .20*$ )
女性役割 M 得点	理想 BMI ( $\beta = -.26*$ )			身体満足度 ( $\beta = .40***$ )
女性役割 F 得点		身体満足度 ( $\beta = .32***$ ) 理想 BMI ( $\beta = -.24**$ )		理想 BMI ( $\beta = -.22**$ )

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ 

## IV. 考 察

### 1. 性役割意識の質問項目について

今回の性役割意識の質問項目は, 石田(1988)<sup>3)</sup>の性役割に関する 36 の特性項目をそのまま使用したものであった. 石田は, 性役割には, 相互に独立している男性性尺度と女性性尺度だけでなく, 男性性, 女性性のともに高い人間性尺度(伊藤, 1978)<sup>6)</sup>があると考え, 上記の 36 項目の質問紙を作成した. しかし本研究では, 男性性か女性性か何れか一方のみを純粹に表す項目のみを抽出することを目指したため, 36 の各項目ごとに男性評定値から女性評定値を減じた差異得点を求め, その絶対値が大きい(男女の評定値の間に有意差のみられる)項目のみを採用した. このような処理の結果, 男性特性尺度 9 項目, 女性特性尺度 5 項目が抽出され, 石田が採用していた人間性に関する 12 項目はすべて除かれた.

石田(1988)<sup>3)</sup>は、20代～50代の男女400名に対し、上記36項目の性役割観に関する調査を実施して因子分析(男女込み)を行っている。その結果、男性役割として、「政治国際問題に関心がある」「指導力がある」などの8項目、女性役割として、「料理をするのが向いている」「そうじや洗濯が向いている」などの8項目を抽出している。これらの項目の多くは本研究の男性特性尺度9項目と女性特性尺度5項目とそれぞれ重複するものであったことから、本研究の男性特性尺度と女性特性尺度は内容的に妥当なものであると考えられる。

## 2. SRBIの質問項目について

今回使用したSRBIの項目は、忠井ら(1993)<sup>4)</sup>が既存の身体イメージ検査を参考に40項目まで絞り込んで大学生版として開発したものを、さらに高校生の理解度にあわせて内容を若干改変し、項目数を38項目としたものであった。本研究の被験者は大学生であったので、本来ならば40項目から構成された大学生版のSRBIを使用するのが適当であろう。しかし、①今後、高校生、中学生を含めて発達の観点から研究を進展させる予定であり、そのために質問項目の内容をできるだけ一致させたほうがよいと考えたこと、②高校生版と大学生版とを比べると、大学生版は「足の力」と「首」の2項目が高校生版よりも多く含まれているだけで、その他の項目は共通しており、両版間に内容的に大差ないこと、の2つの理由から、本研究では被験者にとって質問がより理解しやすい高校生版の項目を使用したのであった。

忠井(1992)<sup>7)</sup>は大学生を対象にSRBI(大学生版)を実施し、その因子構造を調べており、「下半身」「内臓」「顔」「頭部」「体力」「上半身」及び「消化」の7因子を抽出している。さらに、大学生を対象とした同様の研究において忠井と金井(1994)<sup>8)</sup>は、SRBI(大学生版)の因子分析結果として、「体型イメージ」「内臓イメージ」「顔イメージ」「体力イメージ」そして「頸部イメージ」の5因子を抽出している。上に述べたように、本研究では高校生版のSRBIを使用しており、大学生版のSRBIを使用したこれらの先行研究の結果と、厳密な意味での比較はできない。しかし、本研究で抽出された体型、内臓機能、消化、顔面の各因子は、これらの先行研究においても同様に検出されており、本研究とこれら先行研究の因子分析の結果は、互いに類似した構造を示していると考えられる。

大学生に8週間にわたる運動プログラムに参加させ、その事前と事後の各被験者の身体満足度を比較して、事前に比べ事後の身体満足度が上昇したことを報告した研究(Ford et al., 1991)<sup>9)</sup>がある。このような短期のスポーツ経験が身体満足度にプラスの影響を及ぼしたという事実は、身体満足度には調査時の被験者の体調や心理(情動)状態によって変動する性質があることを示している。元来、身体満足度を含む身体イメージ(body image)という概念は、一定の価値や信念というよりも、情動状態を反映する力動的な特性であり、そうである以上、調査時点での被験者の情動状態の影響を受けることは避けられないであろう。

SRBIの再テスト信頼性(6ヶ月間隔)について忠井と金井(1994)<sup>8)</sup>は、頸部以外の体型、内臓、顔、体力の各イメージでは概ね良好な信頼性係数を報告しており、SRBIの再テスト信頼性に関してとくに問題はないと思われる。ただ、研究のより一層の厳密さを求めるならば、身体満足度のこのような状況依存的な特性を考慮した手続き上の工夫、例えば、SRBIの調査時に被験者の情動状態や体調などを調べる質問紙を同時に施行することなどが必要になると思われる。

## 3. 性役割意識と身体満足度に対する性別の影響

男性役割のF得点と女性役割のM得点の2つの性役割得点において男子よりも女子の方が有意に高い得点を示した。これはつまり、男性に対して女性特性を、女性に対して男性特性を期待する程度は、男子より女子の方が高いことを意味している。換言すれば、女子は男子よりも男女の社会的役割の中に異性性が混入することを認める傾向が強いということである。これと同様の所見は柏木(1972<sup>5)</sup>、1974<sup>10)</sup>)によって報告されている。彼女は性役割認知パターンにおける性差の存在を指摘し、男子は男女に対照的な役割分化を期待認知しているのに対して、女子では男女相互に重複した役割特性を期待していると説明している。

伊藤と秋津(1983)<sup>11)</sup>は、このような性役割意識における性差は高校時代から顕在化し始めることを指摘している。すなわち、中学から高校時代にかけて男子は男性役割の価値を高めていくのに対し、女子は高

校を境に転換がみられ、女性役割から男性役割へと価値の移行が生じる。そのため、学年が進むに連れ男子が男性役割と女性役割の自己に占める価値を明瞭に峻別していくのに対し、女子では男性役割、女性役割の双方が自己の価値規範として受け入れられるようになるというのである。しかし、小、中学生を対象とした斉藤(1985)<sup>2)</sup>も、女子は性役割期待について男女両特性の分離を強く求めないという傾向を見いだしていることから考えて、性役割意識の性差は高校入学前からある程度発現しているとみた方がよいのかもしれない。

身体満足度の合計得点、体型イメージ、及び顔面イメージでは、男子よりも女子の方が有意に低い得点を示した。このことは、つまり、全体的な身体満足度や自己の体型や顔面に関して女子の満足度は低いということである。青年期の身体満足度に関する先行研究の殆どが女子の満足度の低さを指摘しており、本研究結果はそれを追認したと言える。ただし今回、身体満足度の中で内臓機能イメージと消化イメージに関しては有意な性差はみられなかった。これらの2つの因子が体型イメージや顔面イメージと本質的に異なるのは、これらが直接的に他者の視線に曝されることがない点である。他者の視線に曝される体型や顔面では満足度が低く、視線に曝されない内臓機能では満足度は低くはなかったと考え、他者からの視線(社会的基準)に対する過剰な意識が、青年女子における身体満足度の低下を助長する一因となっていることが推察される。

松浦(1988)<sup>12)</sup>は女子大生がやせの水準にあるBMI( $18.9 \pm 1.1$ )を理想的な体型として希求していることを報告している。本研究でも理想BMIは女子ではスポーツ群( $19.1 \pm 1.4$ )、一般群( $18.0 \pm 1.0$ )ともに20.0をかなり下回っており(表3参照)、女子青年らが強い瘦身願望を持っていることが再確認された。馬場と菅原(2000)<sup>13)</sup>は、瘦身願望を、自己の体重を減少させたり、体型をスリム化しようとする欲求で、食事制限、薬物、エステなど様々な瘦身行動を動機付ける心理的要因と定義した上で、スリムな体型を獲得することによって今よりも良いことがあるという「瘦身メリット感」が高まるほど瘦身願望が高くなることを指摘している。この指摘と、女子の身体満足度の低さと、自己評価、不安、抑うつ症状との関連性(例えば、Kostanski and Gullone, 1998)<sup>14)</sup>とを併せ考えると、女子青年における精神保健対策として、身体満足度を低下させるほどの強い瘦身願望と、さらにその前提にある瘦身メリット感を低減させる健康教育的な介入が重要と言えよう。

#### 4. 性役割意識と身体満足度に対するスポーツ経験の影響

性別あるいは一般群とスポーツ群の群別の比較から、体型に関する変数では性と群の主効果が有意となり、女子よりも男子の方が、また一般群よりもスポーツ群の方が実際に大きい(重たい)こと、また、大きい(重たい)体型を望んでいることが明らかになった。青年後期では女子より男子の方が体型的に上回っていることは当然であり、また、一般学生よりも運動部に所属する学生の方が体型的に上回っていることも十分に予測できた結果であろう。

性役割意識に関する4得点(男性M、男性F、女性M、女性F)では、群の主効果は有意ではなかった。したがって、スポーツ経験は性役割意識に対して直接的な影響は及ぼしていないと結論できる。また、身体満足度の合計得点及びその4つの下位得点(体型イメージ、内臓機能イメージ、顔面イメージ、消化イメージ)において群の主効果が有意となったのは消化イメージであり、一般群よりもスポーツ群の方が消化イメージの満足度が高いことが明らかになった。これは、スポーツが消化器系の活動やその認知に対してプラスの効果を持っていることを示唆している。

身体満足度に関する消化イメージ以外の4変数では、群の主効果は有意にならなかったのであるが、数値的(平均値)には身体満足度は一般群よりスポーツ群の方が得点が高い傾向が窺われた。身体満足度に対するスポーツ経験の影響を検討した先行研究を概観しても、プラスの影響が存在するという報告(例えば、葉賀ら, 1998<sup>15)</sup>; Petrie, 1996<sup>16)</sup>)が比較的多くみられる。また、そのような影響を明確には見いださなかった先行研究(例えば、Davis, 1990<sup>17)</sup>)においても、身体満足度の平均値は一般群よりスポーツ群の方が上回っている。これらの結果に加え、先に紹介した短期の運動の後に身体満足度が上昇したというFord et al. (1991)<sup>9)</sup>の研究結果を併せて考えると、スポーツを持続している者の身体満足度はどちらかという高い傾向にあるとみてよいのではないかと思われる。

## 5. 性役割意識と身体満足度の関連に対するスポーツ経験の影響

重回帰分析の結果をみると、一般群の場合、女子では、男性 M、男性 F、女性 M の 3 つの性役割得点に対して身体満足度が有意な説明力を持っていることが明らかになった。すなわち、身体満足度の高い女子は、異性(男性)に対して男性、女性両方の特性を求め、さらに自身と同性の女性に対して男性特性を求める傾向が高くなるのである。一方男子でも、男性 M、女性 F に対して身体満足度が有意に寄与していることが判明し、身体満足度の高い男子ほど、男性役割として男性特性を、女性役割として女性特性を期待する傾向が高くなることがわかった。さらに、女子では女性 F に対して理想 BMI が有意に寄与しており、男子では男性 M と女性 F に対して理想 BMI が有意に寄与していた。つまり、よりスリムな体型を希求することは、女子の場合、自身と同性の女性役割として女性特性を期待する程度が強くなることと関連し、男子では、男性役割と女性役割に対してそれぞれ同性の特性を期待するようになることと関連するのである。

さて冒頭で述べたように、青年期前期(思春期)を対象に検討した齊藤(1985)<sup>2)</sup>は、男性役割期待、女性役割期待に対して身体的要因、身体満足度ともにあまり影響を与えていないことを明らかにしたのであるが、今回の結果から考えて、この齊藤の所見は青年期後期には必ずしも当てはまらなないと結論できる。

青年期の前期と後期との間でこのように結果が異なった理由の一つには、青年前期の時点では社会的ステレオタイプとして保持していた性役割意識が、その後青年後期に至るまでに身体満足度をはじめ様々な要因の影響を受けて修正されたことが考えられる。ただし、当然のことではあるが、青年期は性役割意識だけではなく、身体満足度も含め自己に関わる様々な心理変数が再体制化を実現する時期である。したがって、青年期に性役割意識、身体満足度の両変数がそれぞれ再体制化される過程において、次第に両変数間の関連性(結びつき)が強くなり、影響を及ぼし合うようになると解釈するのが妥当かもしれない。柴田と野辺地(1991)<sup>18)</sup>は、大学生において、女子が自分の身体をどの程度女らしいと認知しているか、あるいは男子が自分の身体をどの程度男らしいと認知しているかということが、性役割意識、身体満足度の双方と関連があることを指摘している。この点からすると、今回、両変数の間にみられた関連性は、自分の身体を女らしい、男らしいと感じる程度が増加することによって強化された可能性も考えられる。しかし、これらは何れも推論の域を出るものではなく、今後の検討を待たなくてはならない。

一方、このような一般群の所見とは異なる所見がスポーツ群において得られた。彼らは相関や重回帰分析において、性役割意識と身体満足度との関連は殆ど認められず、僅かに女子において、男性 F 得点と身体満足度との関連がみられただけであった。女子ではこれ以外に性役割意識に対して有意に関連する変数はみられなかった。男子では、身体満足度は性役割意識に対して関連はみられず、男性 F 得点に対して実際の身長が、さらに女性 M 得点に対して理想 BMI が有意に寄与していた。これは、身長が高くなるほど男性役割として女性特性を期待し、スリムな体型を望むほど女性役割として男性特性を期待する程度が低下するという解釈の困難な所見であった。何れにせよスポーツ群の場合、一般群に比べて、身体満足度は性役割意識に対してあまり影響を及ぼしていないと言える。

何故、スポーツ群では性役割意識と身体満足度との間の関連がこのように少なかったのだろうか。スポーツ選手は性役割行動において保守的であるとの指摘(Houseworth, et al., 1989)<sup>19)</sup>があるが、この点からすると、大学運動部に所属する学生は、青年期前期に身につけた性役割の社会的ステレオタイプを、あまり修正することなしに青年期後期まで保持し続けたのではないかと考えられる。しかし、もしそうであれば、一般群とスポーツ群の性役割意識の間に差が認められることが予想されるが、すでに指摘したように(表 4 参照)、性役割意識において両群間には差はないことが判明していることから、この考え方の妥当性は低いと思われる。

運動部に所属する学生は、その自己意識(概念)の形成過程において、競技や練習における身体運動からの生理的、心理的な直接的影響のみならず、彼らを取り囲んでいる社会的環境からの影響も同時に複合的に受けている。それらの生理・心理・社会的諸要因の中には身体満足度や、自分の身体の男らしさ、女らしさの認知以上に性役割意識の形成に作用する要因があるのかもしれない。そのような要因の検索、及びそれらの性役割意識に対する作用機序を解明することは、青年期のスポーツ選手における心理的 well-being

の維持, 向上を考える上で役立つと思われる。

## V. 要 約

大学生計 453 名を対象に, 性別とスポーツ経験の差の観点から, 性役割意識と身体満足度, 及びそれらの関連性について比較分析した。性役割意識の項目の因子分析の結果, 「男性特性尺度」と「女性特性尺度」の 2 因子が抽出され, これらを基に, 男性役割における M, F 得点, 女性役割における M, F 得点が得られた。身体満足度の項目の因子分析では, 「体型イメージ」, 「内臓機能イメージ」, 「顔面イメージ」, 及び「消化イメージ」の 4 因子が抽出された。性役割意識と身体満足度の変数を従属変数とした分散分析では, 性の主効果は男性 F, 女性 M, 及び体型, 顔面の各イメージと身体満足度合計得点において有意となり, 群の主効果は消化イメージだけで有意となった。相関分析において, スポーツ群では, 一般群に比べ, 身体満足度合計得点との間の相関が有意となった性役割意識に関する変数の数は少なかった。さらに重回帰分析においても, 一般群では身体満足度合計得点は性役割意識に影響を及ぼしているが, スポーツ群ではそのような影響は殆ど見られないことが明らかになった。

付記: 本論文の共著者の一人, 黛誠先生におかれましては, 平成 14 年 6 月 19 日にご逝去されました。

ここに, 謹んで哀悼の意を表します。

## VI. 文 献

- 1) 柏木恵子 1967 青年期における性役割の認知 教育心理学研究, 15, 193-202.
- 2) 斉藤誠一 1985 思春期の身体発育と性役割意識の形成について 教育心理学研究, 33, 336-344.
- 3) 石田英子 1988 成人男女における性役割観—男性役割観と女性役割観の動向—お茶の水女子大学人間文化研究年報, 12, 119-132.
- 4) 忠井俊明, 金井秀子, 各務美佐緒ほか 1993 自己身体イメージの発達に関する検討, 京都教育大学教育実践研究年報, 9, 25-34.
- 5) 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知Ⅱ 教育心理学研究, 20, 48-59.
- 6) 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 7) 忠井俊明 1992 身体イメージに関する研究(その 1) 京都教育大学紀要 Ser.B, 81, 125-137.
- 8) 忠井俊明, 金井秀子 1994 青年期の身体イメージの特性に関する研究 学校保健研究, 36, 180-188.
- 9) Ford, H.T., Puckett, J.R., Reeve, T.G., et al. 1991 Effects of selected physical activities on global self-concept and body-cathexis scores. *Psychological Reports*, 68, 1339-1343.
- 10) 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知Ⅲ—女子学生青年を中心として—教育心理学研究, 22, 205-215.
- 11) 伊藤裕子, 秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, 31, 46-151.
- 12) 松浦賢長, 小林 臻, 飯島久美子ほか 1988 女子学生の体格意識に関する研究 小児保健研究, 47, 673-676.
- 13) 馬場安希, 菅原健介 2000 女子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, 48, 267-274.
- 14) Kostanski, M., and Gullone, E. 1998 Adolescent body image dissatisfaction: Relationships with self-esteem, anxiety, and depression controlling for body mass. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 39, 255-262.
- 15) 葉賀 弘, 溝畑寛治, 雑古哲夫 1998 大学生スポーツ選手の自己概念ならびに身体イメージに関する研究, 關西大學「文學論集」, 48, 49-60.
- 16) Petrie, T.A. 1996 Differences between male and female college lean sports athletes, nonlean

sports athletes, and nonathletes on behavioral and psychological indices of eating disorders. *Journal of Applied Sport Psychology*, **8**, 218-230.

- 17) Davis, C. 1990 Body image and weight preoccupation: a comparison between exercising and non-exercising women. *Appetite*, **15**, 13-21.
- 18) 柴田利男, 野辺地正之 1991 青年期の身体に対する男らしさ・女らしさの認知 教育心理学研究, **39**, 40-46.
- 19) Houseworth, S., Peplow, K, and Thirer, J. 1989 Influence of sport participation upon sex role orientation of caucasian males and their attitudes toward women. *Sex-Roles*, **20**, 317-325.